

## 報告記事

## 第 75 回 通常 総 会 創立 75 周年 記念 行事 第 119 回 講演 大会

平成 2 年 4 月 3 日第 75 回通常総会、創立 75 周年記念行事(特別表彰, 特別講演), 名誉会員推挙式, 表彰式, 受賞記念特別講演が, 4 月 3 日から 5 日までの 3 日間第 119 回講演大会が東京工業大学大岡山キャンパスで開催された。

### 第 75 回 通常 総 会

第 75 回通常総会は八木会長が議長となり, 木下副会長・専務理事司会のもとに 4 月 3 日午後 1 時より東京工業大学講堂で開催された。冒頭に八木会長の挨拶が行われた。

(社)日本鉄鋼協会第 75 回通常総会, 並びに第 119 回講演大会を開催するに当たりまして, 一言ご挨拶申し上げます。

創立 75 周年を機に創立当時を振り返ってみますと, 野呂景義, 今泉嘉一郎, 香村小録, 俄国一各氏, いずれも後に会長を歴任された先駆者の方々を中心として, 本会は大正 4 年 2 月に誕生しました。工学系の学会は, 学術と生産技術を共に重視すべきで, いずれか一方に偏ってはならないとの考えから鉄鋼協会と名付けられました。以来, 75 年の永きにわたりその精神が受け継がれ, 歴代会長, 副会長, 理事, 委員をはじめ, 会員各位のご協力により, 鉄鋼科学技術の進歩, あるいは鉄鋼業の発展に大きな足跡を残し, 本年 2 月に 75 周年を迎えたのであります。皆様のご尽力に対しまして敬意を表すると共に, ご同慶に存ずる所でございます。

また, 4 分の 3 半世紀を締めくくるこの記念すべき総会において, 私が会長の任にありますことは誠に光栄に存じております。

この記念すべき諸行事を挙げるに際しましては, 東京工業大学関係各位のご理解によりまして, 多くの会場・施設をお借りすることができ, 誠に有難く厚く御礼申し上げます。この上は, 通常総会をはじめ各種行事が, 円滑に運営されますよう祈念いたしております。特に本日から 3 日間の講演大会では, 発表論文 751 件を数え, その内容は基礎から応用, さらに萌芽・境界技術へと広範囲にわたっており, 将来への期待大なるものがあり, ご同慶に堪えない所でございます。

さて, 私が会長であったこの 2 年間は, 久松敬弘前会長時代に関係各位のご苦勞によって計画された「臨時協会事業検討委員会」の, まとめの期間でありました。従いまして役員・委員の皆様には, 特段のご努力をお願い

いたしました。予算の削減, 収支の改善等目標はすべて, 完全に達していただきましたことを申し上げておきます。このような状況下にあっても本会は, 学会として行うべき各事業はおのおのの委員会の英知によって, 内容の濃い充実した運営をしていただきました。

また, 平成 2 年度の予算編成に当たりましては, 21 世紀に向けて今後とも鉄鋼業が揺るぎない発展を維持していくためには, 「基礎研究と応用技術のいっそうの充実が必要である」との認識に立ち, 共同研究会, 特定基礎研究会, 鉄鋼基礎共同研究会の他, 単独の各種研究会を含めテーマ拡充を進めることにいたしました。更に世界情勢に目を転ずるとき, 本会は鉄鋼の学術技術の学会としての立場から, 国際的責務の一端を担う方法として, 今後とも国際会議を積極的に開催し, あるいは ISO・TC 17 関係幹事国業務の推進も継続することいたしました。

本来ならば十分な時間を費やし, 私の所見を申し述べるところではありますが, 本日は諸行事の都合上お許し願いたく存じます。ただ今後の研究開発に関連してもう一言付け加えさせていただきます。

私は企業における鉄鋼研究と大学の研究を比較するとき, 研究費の大きな格差を感じる所でございます。大学におかれましては, 先生方の大変なご努力によりまして, 比較的少ない研究費を有効に活用され, さまざまな研究成果を挙げておられますことに, 感激しております。しかしながら, 近年特に科学技術の進歩が日進月歩でありますことと, 理工学系の学生が製造業に魅力を失ってきていることを考え合わせますと, 研究費および研究設備のいっそうの拡充が必要であると考えます。

科学技術立国日本の明日のために, 今こそ官民共に協力して「支援体制を確立する必要性」を強く感じている所でございます。

皆様, 本会の創立 75 周年を契機に, 諸先輩が残された多くの業績と, 築かれた伝統に思いをいたし, 我々鉄鋼技術に携わる者として技術開発・研究開発の推進のた



写真 1 通常総会における八木会長挨拶

めにいっそうの努力をしようではありませんか。今後とも会員各位のご研鑽をお願いする所でありたいと存じます。

最後に、後ほど俵賞、製鉄功労賞、渡辺義介賞、西山賞をはじめ、各賞の表彰式と名誉会員推挙式が行われますが、受賞者の皆様並びに新名誉会員の皆様のご業績に敬意を表し、心からお祝い申し上げますと共に、今後共いっそうのご活躍をお願いいたしまして私のご挨拶いたします。

以上挨拶が行われた後、総会の議事に入った。付議された議案は次のとおりである。

議案第 1 号 平成元年度事業報告、収支決算ならびに財産目録の件

議案第 2 号 平成 2 年度事業計画ならびに収支予算の件

議案第 3 号 理事、監事ならびに評議員選挙の件

初めに議事進行上、議案第 3 号から始められた。選挙管理委員に梶 晴男君、角田方衛君を選び投票が行われ、別室において開票に入った。続いて議案第 1 号ならびに第 2 号は関連しているので、一括議題とし付され、これを事業と会計に分け、事業については中川 一理事、会計については伊藤慶典理事からそれぞれ報告ならびに提案がなされた。

「平成元年度事業報告ならびに平成 2 年度事業計画」

(特記事項)

企画委員会のもとで若手を中心とした会員増強策について検討の後理事会に答申いたしました。会員増強の内容は鉄鋼が急速に業容を拡大している現状にあわせ鉄製造を支える周辺技術、鉄と関連する材料まで対象範囲を拡大すること。委員会、組織の中で積極的に若手を起用すること。近年の若手会員の減少を防ぐため研究助成制度の充実及び地域活動等の支部活動、会員へのサービス、PR 活動のおおのの充実。そして学会誌と論文集の分離を検討し、編集の改善、内容の充実をはかる等広範囲にわたっております。

これらの諸問題につき関係委員会並びに事務局で十分検討を加え答申内容を実現するよう努めたいと存じます。

(刊行事業)

各事業の概略につき申し上げます。まず会誌関係ですが、平成元年度の和文会誌「鉄と鋼」は、普通号 11 冊、特集号「複合材料」の計 12 冊を発行いたしました。また、欧文誌「ISIJ International」は特集号 7 冊を含め 12 冊発行いたしました。平成 2 年度の「鉄と鋼」「ISIJ International」は共に各 12 冊の発行を予定しております。

また、講演大会論文集「材料とプロセス」は春秋各三分冊として発行しております。

(講演大会・研修事業)

春秋の講演大会は、春は横浜、秋は札幌で開催し、発

表件数は討論会を含め 1714 件でした。特に札幌では過去最高の発表件数を記録しました。平成 2 年度の講演大会は本日より三日間東京工業大学で開催し、発表件数は討論会を含め 751 件であります。秋は東北大学で行われます。

平成元年度の西山記念技術講座は「電磁気力を利用したマテリアルプロセッシング」他 2 テーマにより東京・大阪で計 5 回開催され、白石記念講座は「人工知能とその応用」他 1 テーマにより 2 回開催されました。平成 2 年度は西山記念技術講座を 4 回、白石記念講座を 1 回予定しております。鉄鋼工学セミナーは合宿形式で、製鉄・製鋼・材料の 3 コースに分かれ宮城県蔵王町で開催されました。

(調査研究事業)

共同研究会は鉄鋼全搬にわたる現場的な研究と情報交流を 19 部会、14 分科会、8 小委員会の構成により行っておりますが、特に本年は製鋼部会と計測制御部会がそれぞれ 100 回記念部会を開催いたしました。

特定基礎研究会は鉄鋼業界からの要望課題について基礎的な研究を行っておりますが平成元年度より「充填層中の気・固・液移動現象」及び「材料電磁プロセッシング」の 2 部会が発足して 7 部会となりましたが 2 部会が年度末に終了しました。平成 2 年度は「コークス製造のための石炭乾留制御部会」が発足して 6 部会で研究活動をする事としております。

本会と日本金属学会、日本学術振興会三者にて組織しております鉄鋼基礎共同研究会につきましては平成元年度は従来の 3 部会に加えて「変形特性の予測と制御部会」が発足しました。平成 2 年度からはさらに 1 部会が発足し 5 部会で研究活動をいたします。

また、独立の各種研究会はそれぞれの目的に沿った活発な活動を行っております。

標準化委員会は鉄鋼に関する工業標準化を推進するため 2 部会 29 分科会 3 小委員会の構成で活動を行っております。

鉄鋼標準試料委員会は化学分析用、機器分析用等標準試料を製造頒布し、国内外の鉄鋼分析技術の向上に努めております。

(国際交流事業)

国際交流事業では「亜鉛および亜鉛めっき表面処理鋼板国際会議」と「材料評価に関する国際会議」と「日本・中国鉄鋼学術会議」を開催いたしました。

平成 2 年度では第 6 回鉄鋼科学技術国際会議を開催いたします。この会議は、20 年前に、本会が提唱した国際会議であり、参加者数約千名を予定しております。

(情報事業・ISO 幹事国業務)

鉄鋼技術情報活動であります。設立以来十余年を経過しましたので情報に対するニーズの変化に対応して技術情報センターのあり方及び日本科学技術情報センター

への協力のあり方等に関する抜本の見直しを含めた検討を行っております。

ISO 幹事国業務といたしましては本部及び各国の分科会と連携をとりながら業務を推進いたしました。特に平成元年度は 10 周年の活動報告をまとめました。平成 2 年度は 6 月にスウェーデンにおいて TC 17 EC 会議を主催し、また、TC 17 SC1 においてはマドリッドで国際会議を主催いたします。

創立 70 周年を記念して発足いたしました学生見学会は 3 月に第 5 回目を実施いたしました。情勢の変化を反映して、定員 500 名に対し 898 名の学生を受け入れました。

#### 「平成元年度会計報告ならびに平成 2 年度収支予算」 (一般会計)

一般会計決算は、収入は 9 億 1 573 万 3 166 円となり、収入予算に対し約 1 746 万円の増収になりました。これは維持会費、出版事業、鉄鋼工学セミナー国際会議参加費、鉄鋼標準試料等の増収によるものであります。

一方、支出の部は、8 億 7 319 万 7 958 円でありまして、予算に対しまして、約 2 602 万円の節約ができました。この結果、平成 2 年度に繰越し可能な収支の差額は、4 253 万 5 208 円となりました。これは、各事業とも委員長、部長をはじめ、関係各位の皆さんにお力添えをいただきました賜であります。

また、決算の結果、期末保有の正味財産、すなわち財産目録は貸借対照表のとおりであります。

ここで特にご説明申し上げておきたいことは、先ほど八木会長のご挨拶にもありましたように、昭和 61 年度に組織した「臨時協会事業検討委員会」の目標年度が、平成元年度であったことでもあります。この委員会発足以来、会員各位には大変なご理解とご協力を賜り、一方、本会といたしましては、会長以下役員、委員をはじめ関係の皆様、さらに事務局一丸となって目標に向かって邁進いたしました。

#### (別途資金会計ならびに特別会計)

別途資金会計は「表彰事業並びに事業資金」会計をはじめ 18 の会計を有しております。いずれも特別資金運営委員会、あるいは理事会の議を経て表彰、奨励、研究助成、技術講座費等に支出し、または蓄積されておまして、その収支ならびに期末保有財産は資料のとおりであります。

また、補助金、他団体からの分担金等を受けて、行っております特別会計は、「ISO 幹事国業務」会計を含め六つの会計がありますが、収支の内容につきましては資料(本誌 1003 ページ)のとおりであります。いずれも委員会を組織して、目的にあった運営をしておまして、その成果は国内外から高く評価されております。

#### (一般会計収支予算)

先刻八木会長がお話しされました予算編成方針に従

い、諸事業の予算を編成いたしました。この編成に当たりましては、各委員会、部会等から事業計画に沿った予算要求書のご提出をお願いし、再三の審議の結果決定したものであります。

また、本年が創立 75 周年に当たりますので記念事業を含め、各事業の推進に万全期し、総額 9 億 6 859 万 9 208 円を計上いたしました。この資金調達のためには、各種の事業収入はいずれも高い努力目標を掲げ、また国際会議積立金からの繰入金も計上いたしました。本年度は維持会員各社に会費を増額させていただきました。

#### (別途資金会計ならびに特別会計)

別途資金会計ならびに特別会計につきましては、いずれも従来と同様の事業計画を策定し、予算を編成いたしました。特に「ISO 幹事国業務」は、昨今の国際情勢を勘案し引き続き計上すると共に、本会、日本学術振興会、日本金属学会の三者で行っております「鉄基礎共同研究会」は、日頃からその成果が高く評価されておりますので、いっそうの充実を期待して、予算を編成いたしました。

以上議案説明の後、井上正文監事より監査報告が行われ、満場一致をもって議案第 1, 2 号が承認された。

引き続き先に行われた選挙の開票が終わり選挙管理委員より候補はいずれも絶対多数で当選された旨報告された。

ここで会長、副会長、専務理事を互選するための臨時理事会が開催され、会長に森田善一郎君(新任)、副会長に岸田壽夫君(留任)、木下 亨君(留任)、増子 昇君(新任)、専務理事に島田 仁君(新任)が互選され、森田新会長の新任挨拶の後、通常総会は終了した。

#### 寄付金の贈呈

(株)神戸製鋼所相談役 外島健吉氏より「鉄鋼に関する技術調査その他有益な事業に供するために」個人の淨財産 1 億円が本会に贈呈された。

引き続き創立 75 周年記念特別表彰、名誉会員推挙式、表彰式が行われた。



左: 佐野幸吉殿 右: John F. ELLIOTT  
写真 2 俵賞受賞者

**俵 賞 (創立 75 周年記念特別表彰)**

佐野 幸吉君 名古屋大学名誉教授  
 (鉄鋼製錬の化学冶金学的研究ならびに研究者の育成)  
 John F. ELLIOT 君 MIT 鉱物資源研究所長  
 (金属物理化学・高温製錬工学の研究ならびにわが国  
 研究者の指導育成)

**製鉄功労賞 (創立 75 周年記念特別表彰)**

石原 重利君 元新日本製鉄(株)副社長  
 井上 道雄君 名古屋大学名誉教授  
 岸田 壽夫君 大同特殊鋼(株)社長  
 小島 浩君 大阪チタニウム製造(株)会長  
 松下 幸雄君 東京大学名誉教授  
 八木 靖浩君 川崎製鉄(株)社長  
 山田 浩蔵君 鋼管鉱業(株)社長

**名誉会員推挙式**

河西 健一君 住友金属工業(株)社友  
 堀川 一男君 日本鋼管(株)社友  
 Mats HILLERT 君 スウェーデン王立工科大学物理冶金  
 学教授

**表彰式**

**渡辺義介賞** 阿部 芳平君  
**西山賞** 加藤 健三君  
**服部賞** 川名 昌志君 山田 龍男君  
**香村賞** 岩崎有一郎君 三好 俊吉君  
**渡辺三郎賞** 牛山 博美君 森 省二君  
**野呂賞** 鈴木 朝夫君 奈良 好啓君  
 吉松 史朗君

**渡辺義介記念賞**

今井 貞雄君 大庭 半次君 笹生 宏明君  
 末永 允君 征矢 昇君 高石 一英君  
 楯岡 正毅君 野田 忠吉君 野見山 寛君  
 原 貞夫君 原淵 孝司君 伴 誠二君  
 松本 昭平君 森 甲一君 横井 信司君

**西山記念賞**

秋末 治君 浅井 滋生君 新井 宏君  
 市田 敏郎君 梶 晴男君 神田 勝美君  
 工藤 昌行君 柴田 浩司君 下村 隆良君  
 角田 方衛君 水流 徹君 福井 寛君  
 馬越 佑吉君 丸川 雄浄君 矢崎 陽一君

表彰式に続いて創立 75 周年特別講演ならびに受賞記  
 念講演会が行われた。

**創立 75 周年記念特別講演**

「R & D と Art & Culture」 文化庁長官 植木 浩君

**受賞記念講演会**

「わが国のばね調の進歩発展について」  
 渡辺義介賞受賞 阿部 芳平君  
 「鉄鋼圧延および加工技術の高速化について」  
 西山賞受賞 加藤 健三君

**湯川メモリアルレクチャー**

4 月 3 日第 8 会場において湯川メモリアルレク  
 チャーが開催された。

「Predicting Carbides in Alloy Steels by Computer」

Prof. Dr. Mats HILLERT, Royal Institute of  
 Technology, Sweden



写真 3 祝賀会会場 (高輪プリンスホテル)

## 第 119 回講演大会

第 119 回講演大会は 4 月 3 日から 5 日の 3 日間まだ桜の花が残る東京工業大学大岡山キャンパスで開催された。

**講演大会** 講演件数は製鉄部門 65 件、製鉄・製鋼共通部門 50 件、製鋼部門 120 件、萌芽・境界領域部門 89 件、加工・システム・利用技術部門 135 件、分析・表面処理部門 76 件、材料の組織・性質 166 件 計 703 件の研究が 18 会場に分かれ発表され、各会場活発な討論がなされた。

**討論会** 一般講演のほかに次の 6 テーマの討論会が行われた。

1. 「高炉下部におけるコークスの挙動」  
座長 山岡洋次郎 副座長 岩永 祐治
2. 「極低炭素鋼・低窒素鋼の精錬技術の現状と課題」  
座長 佐野 正道 副座長 藤井 徹也
3. 「表面処理鋼板の成形性」  
座長 林 央 副座長 角山 浩三

### 4. 「有機材料の構造解析」

座長 岩田 英夫 副座長 小池 俊夫

### 5. 「重防食被覆鋼材の耐久性評価技術および寿命推定法」

座長 市田 敏郎 副座長 吉田耕太郎

### 6. 「ステンレス鋼における組織制御と材質」

座長 細井 祐三 副座長 根本 力男

**創立 75 周年記念祝賀会** 創立 75 周年記念祝賀会は 4 月 3 日午後 6 時より高輪プリンスホテル“プリンスの間”で開催された。鈴木朝夫東京工業大学教授司会のもと、八木会長、森田新会長、東京工業大学学長末松安晴教授の挨拶があり、本会名誉会員吉崎鴻造氏の乾杯で始められた。

祝賀会は招待者を含め 300 名の参加者が着座し、なごやかな雰囲気のもと、歓談がくりひろげられた。

**ジュニアパーティー** 4 月 4 日午後 5 時 30 分より東京工業大学内食堂で開催され、若手研究者、技術者を中心に懇談がなされ親交を深めた。参加者は 170 名であった。

## コ ラ ム

### “夢”再募集

1988 年 9 月号 (Vol. 74), p. 1888 で、鉄鋼研究に関する“夢”を募集したが、今のところ、応募者は皆無とのことである。その理由として、(1)忙しくて、“夢”などにかまっていられない。まして、書面に書いて投稿する暇はない。(2)この記事を読んでいない。(3)公表するような“夢”を思いつかない。(4)真似されたくないの、公表しない。などが考えられる。

応募が少ないのは、予想どおりとはいえ、一つくらいはあるのではないかと期待していたが、皆無とは残念なことである。読者諸兄が実際には多くの夢を持っておられるのであれば心配ないが、夢がなくなってきているとしたら、ゆゆしき問題ではなからうか。鉄鋼基礎共同研究会のテーマなどにしても、関係者は良いテーマさがしに苦労しておられるのも、この反映でなければいいのだが……。

いずれにしても、我々は、たとえ人に言えなくても、皆なんらかの“夢”を持っているはずである。例えば、規模の大きい夢としては、設備的、技術的に不十分で、地球資源、環境上からも種々の問題のある開発途上国の鉄鋼産業の合理化、発展への貢献がある。これは技術のみならず、政治と経済を含む総合的な問題であるが、地球的な視点に立つてのプロジェクトや研究に挑

戦したいものである。また、寸法は小さいが、大きな夢としては、相変化における核生成制御法の確立がある。近年における、原子レベルでの種々の分析手法の発展により、核生成機構の解明にかなり肉迫できるところまで到達している。従って、新たなプロセッシングと組み合わせることにより、異質核生成を制御できれば、材料の性質を飛躍的に改善できるであろう。

この他、凝固によらぬ合金化法であるメカニカル・アロイング、ナノ寸法の組織を有するナノ材料の創製、金属と有機材料がよりミクロに複合化した材料、超塑性材料、超耐食性材料などの開発、等々、皆さん、自分なりの夢をもっておられるに違いない。

ある人にとっての夢が、他の人にはつまらない夢であることは少なくない。逆にすべての人にとっての夢は非現実的なものがほとんどである。自信がなくても、夢がないと思われるより、“面白い、面白い”と繰り返し唱えていけば、本当に面白い夢になるのではなからうか。また若い人達を元気づけることにならなからうか(もっとも一人よがりになっては困るが)。諸兄のご意見を御伺いしたいものである。

If you don't have a dream, how are you going to make a dream come true? (Oscar HAMMERSTEIN II)

(大阪大学工学部 大中 逸雄)